

一本の釣りざお

小川未明

青空文庫

一

あるさびしい海岸^{かいがん}に、二人^{ふたり}の漁師^{りようし}が住^すんでいました。二人^{ふたり}とも貧^{ます}しい生活^{せいかつ}をしていましたから、町^{まち}や都^{みやこ}に住^すんでいる人々^{ひとびと}のように、美^{うつく}しい着物^{きもの}をきたり、うまいものをたくさん食^たべたり、また、ぜいたくな暮^くらしなどをすることは、思^{おも}いもよらないことでありました。

二人^{ふたり}は、どうかして、もつといい暮^くらしをしたいものだと思^{おも}いましたけれど、どうすることもできなかつたのです。青^{あお}い海^{うみ}の面^{おもて}を見^みつめながら、二人^{ふたり}は、そのような幸福^{こうふく}になれる日^ひのことばかり考^{かん}えていました。

「いくら考^{かん}えたつてしかたがないことだ。俺^{おれ}たちは働^{はたら}くより途^{みち}がないのだ。」と、乙^{おつ}は甲^{こう}を悟^{さと}し、自分^{じぶん}を勇気^{ゆうき}づけるようにいいました。

「それはそうだが、このうえ俺^{おれ}たちは働^{はたら}くこともできないじゃないか。」と、甲^{こう}は、ため息^{いき}をしながら答^{こた}えた。

ほんとうに、二人^{ふたり}は、雨^{あめ}の降^ふる日^ひも、また風^{かぜ}が吹^ふいて、少^{しょう}々^{しょうな}波^{なみ}が高^{たか}いような日^ひでも、

船ふねに乗のつて沖おきに出でて、網あみを打うつたり、魚さかなを釣つつたりしたのであります。

なにごとふたりも二人は、たがいに助たすけ合あいました。そして、たいていはいっしょに働はたらいていたのであります。けれど、人にんげん間の運うんというものは、まことに不思議ふしぎなものであります。こうして、同おなじ船ふねに乗のつて、同おなじく働はたらいても、一ひとり人に幸さいわい、一ひとり人にはなんでもないこともあるものです。

二

ある春はるの日ひのことでありました。陸おかには、桜さくらの花はなの咲さく時じぶん分ぶんでありました。二人は、北きたの青あおい海うみの上うへに出でて釣つりをしていました。たいがかる時じぶん分ぶんでありました。いくら二人は、こうしていっしょうけんめいになつてたいを釣つつても、それを自分じぶんたちが食たべることはできなかつた。みんな町まちの魚さかな屋やに売うつてしまつて、その金かねで家かぞく族ぞくのものを養やしなわなければならなかつたのです。

「ほんとうに、俺おれたちは、こうして毎まい日にちたいをとつても自分じぶんたちの口くちに入いらないのは、考かんがえると、つまらないことだ。今日きょうはひとつ自分じぶんが料りよう理りをして子こ供どもらにたべさせてやろ

う。」と、甲こうがいました。

「ほんとうに、そうだ。私も、家うちに帰かえったら、ひとつ料理りようりをして子供こどもや妻つまに食たべさしてやろう。」と、乙おつがいました。

その日ひふたりは、海うみから働はたらいてたがいに家うちに帰かえりました。そして、甲こうも乙おつも、自分じぶんたちのとつた大おおだいを一尾びきずつ料理りようりをしました。すると甲こうのほうのたいの腹はらから小指こゆびの先さきほどの真珠しんじゆが飛び出だしたのであります。

「これはたいへんなものが出でた。」といって、甲こうは喜よろこんでおどりがりました。そして、家うちじゆうのものは大騒おおさわぎをしました。

甲こうは、さつそく乙おつのところへやってまいりました。それは、乙おつのところのたいからも真珠しんじゆは出でなかつたかと聞ききにきたのであります。すると、乙おつは、甲こうのために喜よろこんでいいました。

「甲こうさん、そんないいことはめつたにあるもんでない。おそらく、あとのたいをみんな腹はらを割わつてみたつて、もうこのうえ真珠しんじゆが入はいっているものでない。これは神かみさまがあなたにお与あたえなさつたのです。」といいました。

甲こうは、こゝろ聞きくといつそう喜よろこんで家うちに帰かえりました。

三

甲こうは、これがために思いおももよらない大金たいきんが手てに入いることになりまして、その翌日あくるひから甲こうは、しばらく海うみの上うえに出でることを休みやすました。こんなときに、骨休ほねやすみをしなければならぬといつたのです。

乙おつは、独りひとで海うみの上うえに出でてゆきました。雨あめが降ふつても、風かぜが吹ふいても出でてゆきました。それを見みると、甲こうは、あまりいい氣持きもちがしなかったのです。なんだか自分独りじぶんひと樂らくをしているのが悪わるいように思おもわれたのです。

「乙おつさん、あまりたくさん金かねは融通ゆうずうもできないが、すこしくらいならいたしましょう

。」と、ある日ひ、甲こうは乙おつにいいました。

乙おつは、考かんがえていましたが、

「それでは、まことにすまないが、私わたしに、さおを買かうだけの金かねを貸かしてください。いまのさおでは、思おもうように釣つりができないから、もつといいさおが欲ほしいものです。」と答こたえ

甲は、内心、いくらいいおを買つても釣れるときは釣れるが、釣れないときには、やはり釣れない。すべて人間のことは運だ、俺のようなものだと思ひながら、「それはお安いことだ。」といつて、わずかばかり金を貸してくれました。乙は、その金で手ごろのさおを求めました。

四

金が入ると、甲は、いままでのようにじつとしてゐることができませんでした。上等の網を買いました。また、いい着物をみんなが買いました。また、町へ出て見物に歩きました。

「金がなくなつたら、また働くばかりだ。」と、甲はいいました。

そのうちに、真珠を売つた金は、すっかりなくなつてしまいました。甲は、ふたたび乙といつしよに海の上へ出て働くことになりました。けれど、昔のように、おちついて釣りをしたり、網を打つたりしてゐることができなかつた。魚がとれると、かたつぱしから腹を割つて見ていました。そして、真珠をのんでいないと、みんなその魚の屍を海の中

にほうりこんでしまいました。

「甲さん、なんでそんな乱暴なことをするんですか。」と、乙はびっくりしていいいます。
「今度、真珠を見つけたら、その金で町へ出て商売をするのです。もう、私は、魚とりなんか問題にしていけない。」といって、ところかまわず網を打ちました。けれど、もう二度と真珠をのんでいる魚はなかったのです。

甲は、とうとう自分のおろかなことがわかる日がきました。そして、おちついて魚をとつて、それをまた町に売って生活をしたときには、まったく昔にもまさる貧乏になつて、上等の網に破れめができたときです。

乙は、さおを大事にして釣りをしました。そして、甲の恩義を長く感じて、甲の困ったときは助けてやりましたので、甲はいまさらながら、一本の釣りざおを貴く思つたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「読売新聞」

1921（大正10）年4月30日、5月2日～4日

※表題は底本では、「一一本《ぼん》の釣《つ》りざお」となっています。

※初出時の表題は「一本の釣竿」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本の釣りざお

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>